

一般社団法人そらの郷（徳島県にし阿波地域）

## 官民連携で目指す

# 世界に通用する観光地域づくり

一般社団法人そらの郷

理事長

村雲 妙子



### 1. にし阿波の概要

四国の中央部、徳島県の西部圏域「にし阿波」は美馬市、三好市、つるぎ町及び東みよし町の2市2町からなるエリアです。

人口は平成27年の国勢調査によると約8万1千人で、前回国勢調査と比較すると約7千人減少し、高齢人口（65歳以上）の構成比も約38%を占めるなど少子高齢化が進んでいます。

また、面積は県全体の約3分の1で、その8割以上を阿讃山脈や四国山地の森林が占め、中央部には「四国三郎」の異名を持つ吉野川が流れています。吉野川は愛媛県と高知県境に水源を発し、「祖谷川」や四国一の清流「穴吹川」、「貞光川」など、数々の支流が流れ込んでいます。

さらに、日本百名山に数えられる、西日本第2の高峰・「剣山」をはじめ、次郎笈や三嶺など1,800mを超える山々がそびえ立ち、美しく雄大な自然環境を有しています。



西日本第2の高峰「剣山」

「にし阿波」の各市町は、様々な観光素材を有しています。

美馬市は、「脇町うだつの町並み」や「寺町」などの歴史・文化、清流「穴吹川」などの自然環境とともに、「藍染め」や「和傘」などの伝統工芸を題材にした製作体験などを活用した観光を進めています。

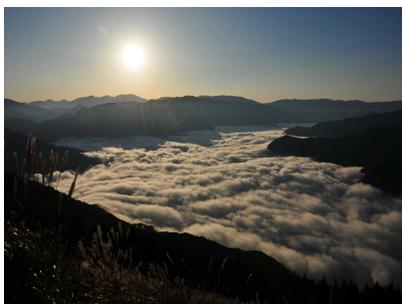
三好市では、「かずら橋」や「古民家」、「池田町本町うだつの町並み・酒蔵」などを観光素材

として活かすとともに、吉野川の景勝地である「大歩危・小歩危」では、遊覧船による「船下り」やゴムボートでの迫力ある「ラフティング」や新しいアウトドア体験として「ツリートレッキング」などが行われています。



藍の集積地として栄えた「脇町うだつの町並み」

つるぎ町においては、「二層うだつの町並み」や「巨樹」など、守ってきた歴史文化や自然とともに、その自然を体感できる「カヌー、カヤック」などが楽しめます。東みよし町では、「吉野川ハイウェイオアシス」を核に、「ジビエ料理」を売りにした農家民宿や「パラグライダー」などのアウトドアスポーツを活用した観光地づくりが行われています。



わき上がる雲海「八合霧」

### 2. 教育旅行として始まった「そらの郷」

2007年に、農山村のありのままの暮らしを体験し、受け入れ家庭と交流する、「体験型教育旅行」の受け入れ組織として「そらの郷山里物

語協議会」が設立され、中学校、高校の修学旅行の受け入れを拡大してきました。

その後、協議会を発展・改組し、2011年に「にし阿波」を活動エリアとする「一般社団法人そらの郷」が、「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」の観光地域づくりプラットフォームとして、設立されました。2017年11月に日本版DMOとして登録されています。

先述のとおり「にし阿波」は、「剣山」や「吉野川」に代表される自然資源をはじめ、歴史文化資源、伝説や伝承、さらに独特の食文化、伝統芸能に彩られた、県内屈指の観光地域です。

このエリアでは、大歩危・祖谷地域の5軒のホテル・旅館により2000年に結成された「大歩危・祖谷いつでも会」が、行政とも連携して地域全体を売り込む活動を行い、国内外からの誘客に成果をあげてきました。



体験型教育旅行での「農業体験」

### 3. 観光地域づくりの中核としての「そらの郷」

2008年に、「にし阿波」が観光圏として認定を受け、2018年には第3期目の観光圏に認定され、新たな段階に入りました。

「そらの郷」では現在、幅広い業種の中核人材「観光地域づくりマネージャー」が所属し、観光地域づくりの戦略策定やマネジメント、旅行商品の開発販売や国内外からの誘客

活動などを担っています。「大歩危・祖谷いってみる会」を中心とする民間と行政が一体となり、日本政府観光局や四国ツーリズム創造機構なども連携し、積極的なインバウンド誘致を図っています。

東洋文化研究者アレックス・カー氏の著作や、海外の旅行ガイドブックなどで紹介された一定の認知度の上に、対象市場を分析し相性の良い国・地域を選び、情報発信や商品造成を働きかける戦略的なプロモーションを展開しています。



「マネジメント会議」で今後の方向性を議論

また「そらの郷」では、急傾斜の山腹に畑や居宅が点在する山村集落をガイドとともに訪れるツアーや、早朝V字溪谷に広がる雲海(八合霧)を鑑賞するタクシープランの開発、販売を行うほか、官民挙げて、多言語表記の看板やパンフレット整備など、さまざまな受け入れ環境整備を進めてきました。



「インバウンド」のお客様を地域みんなで「おもてなし」

この結果、当エリアの昨年の外国人宿泊者数はおよそ29,000人で、5年前の10倍以上になりました。国別では東アジアが多いですが、欧米豪からの小規模富裕層ツアーも増加しており、ブランド力の向上を感じています。

#### 4. 日本版DMO、さらに世界水準DMOに向けて

全国レベルで他の観光圏との広域連携も進んでおり、13観光圏が自発的なアライアンス体制を組んで共同

事業を実施しています。

その中で共通ブランド「UNDISCOVERED JAPAN まだ見ぬ日本」として世界へ情報発信する取組のまとめ役を、にし阿波が担当しています。

また、2016年11月に地域の食、農業、特徴ある景観等の観光資源を核としてインバウンド誘致を図る「食と農の景勝地」に、西日本で唯一「にし阿波地域」が選ばれました。さらに、今年3月にはFAOの「世界農業遺産」に「にし阿波の傾斜地農耕システム」が認定されました。



世界農業遺産「つるぎ町猿飼の傾斜地農業」

こうした様々な制度により、にし阿波ならではの自然景観、傾斜地集落の暮らしや生活文化が、日本の顔として認められたことは、地域にとって大きな喜びでした。

一方で、にし阿波は厳しい人口減少、高齢化の先進地でもあり、観光を生かした「住んでよし訪れてよし」の地域づくりは、必要不可欠な取組です。

「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」は今年度から第3期観光圏がスタートし、新たなステージを目指す節目の年を迎えました。観光圏を構成する民間事業者、2市2町、県などが、しっかりと官民連携した、観光地域づくりを推進することとしています。

この中核として「そらの郷」は、国内外の来訪客から選ばれる次世代のブランド観光地域となるよう、世界に通用する観光地域づくりを引き続き進めていきます。

そのことは、「日本型DMO」の段階から一歩先に進んだ、「世界水準のDMO」として認められることにつながると信じています。取組はまだまだ道半ば、やるべきことは山積していますが、これまでの成果を活かして、さらに高いステージにチャレンジし

ていきます。



樹齢千年の老大樹「加茂の大クス」

#### 5. 新たな担い手との連携による新たな展開の芽生え

にし阿波の傾斜地集落では、急斜面に住居が点在し、平坦な段々畑を作ることなく斜面のまま農業が営まれています。この畑では、ススキを積み重ねた「コエグロ」が美しい景観をつくり出しています。「コエグロ」で乾燥させたススキを畑に敷くと、土壌の流出や雑草を防いで微生物が育まれ、ススキが肥料となって作物の成長を助けます。このように、長い時間かけて培われてきた高度に植物資源を循環させる農業や、自然と共生する暮らしが、にし阿波の2市2町の至るところで見られます。

こうした地域の価値を伝えるためには、高いレベルのガイドやコンテンツが必要ですが、人口減少の中、地域だけでは担い手が足りません。そこで、地域おこし協力隊をはじめ都市部からの移住者や起業家などに期待が集まります。彼らとの柔軟な連携により今後、新たな展開が生まれる可能性があります。

地域で生まれ育ち地域を誇りに思う住民と、新たな担い手とそのコラボ。次のステージに向けて、芽生えや動きが始まろうとしています。今後も地域が一体となった「観光地域づくり」の中核として取り組んでいきます。